

かささぎ通信 第139号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2024年 9月 13日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

2024年7月の「森三郎の作品を読む会」では、
「鳥勘左衛門奉公はじめ」(『雪こんこんお寺の柿の木』1943年12月)と「ひとりつ子」(『赤い鳥』1933年8月号)を読みました。

「鳥勘左衛門奉公はじめ」は話の全体に、森三郎好みの言葉遊びが散りばめられています。山の鳥の勘左衛門が江戸へ出て来て、丹頂朝日之介という鶴のお大名の邸の中元に雇われるという話です。奥方は白首御前、お姫様の名前は舞鶴姫。舞鶴姫のいなづけが白鷺主水之介というように、登場するのは鳥、鶴、白鷺で、食べ物も雁鍋といった調子で鳥尽くしです。鳥はお姫様から白鷺主水之介様への文づかいを毎日頼まれます。「精出して勤めたら主水之介様にお願ひして、侍分に取り立てあげよう」とお姫様に言われますが、今はまだ奉公はじめの庭掃除をせさせとしている状況です。

「腹が北山」、「嫌味の百曼陀羅」などの表現が出てきますが、三郎の育った時代には説明なしで分かる慣用語だったのでしょう。小学館『国語大辞典』にはそれぞれ、「北」を「来た」にかけて、腹がすいてきたことをいうしゃれ。また「百曼陀羅は副詞的に使って、幾度も幾度も繰り返すこと」と出ています。途中でぶつかりそうになった薦と言ひ合ひになって、

「山の鳥もただ鳴きやせぬが／ 枕団子がくひたさに」とからかわれると、「枕団子に目をくれたのは昔のことよ。今ぢやお山の夢もみないチャキチャキの江戸つ子だ、気をつけろ」と啖呵を切っているのは滑稽です。

薦の歌ったのは和歌山県地方の子守歌に似たような歌があります。薦の歌ったのは和歌山県地方の子守歌に似たような歌があります。

「枕団子」が「墓の団子」になっています(『日本わらべ歌全集17 和歌山のわらべ歌』)。森三郎の「竹馬与市」も近江の子守歌に起源がある名前でした。

最後は鳥が「心短気でわしや国をでて／ 今はならぬ職をする」

と歌いながら、お姫様に貰った褒美のお金で飲み屋に向かう場面で終わっています。この歌にはどこことなく悲哀が感じられます。鳥もどんな事情で山を出て来たのでしょうか。言葉遊びを楽しむ中にもどこか切ない歌に、人には言えない辛さを抱えた鳥を見守る三郎の思いが伝わってきます。

『赤い鳥』の作品は『雪こんこんお寺の柿の木』出版より十年前、三郎22歳の時の作品です。「ひとりつ子」の主人公は、十二歳(小学校六年生)の慶一です。慶一は呉服屋の一人息子で、学校では人一倍よわむしで、人といふか出来ないくせに、家では一人ではいばりちらしていました。この主人公の設定が「だつ子」とよく似ていることは「かささぎ通信」第33号で触れました。今回は、慶一がいばり散らす相手の新どんに目を向けてみます。新どんは去年小学校を出て、すぐに奉公に来た子で、慶一より三つ上の十五です。新どんが、お客様の仕立物を頼みに縫物をするお婆さんの所へ行き、帰りに何かもらって口に入れて食べているところを慶一は見てしまいます。外で食べながら歩くことをお婆さんは下品だと言って叱るので、慶一もお婆さんのように新どんを問い詰めます。実は森三郎も十四歳の時、高等科の卒業式が終わったその日の夜行で川上児童楽劇園に入園するために上京します。初めて親元を離れての集団生活で、希望もあつたけれど心細かったことでしょう。食べ盛りの少年にとって、特に食べ物が自由にならなかったことの辛さを訴えていたことが、残された母の手紙で分かります。一番下の奉公人の新どんが内緒でもらった焼き芋をそつと食べる描写では、三郎は子どもの頃の自分を思いだしていたかもしれません。それでも、自分に辛くあつた慶一をかばう新どんに対して慶一が恥ずかしくなるところに、この話の救いがあると思います。

〈次回予定〉2024年10月11日(金)午後一時半〜三時半

「飴の鳥」(『雪こんこんお寺の柿の木』1943.12)

「ハーモニカ」(『赤い鳥』1933.10)